

きいむんの どろ〜ちゅいむにい〜

- 第2回 -

テーマ 冊封使がやってきた！！

検索キーワード

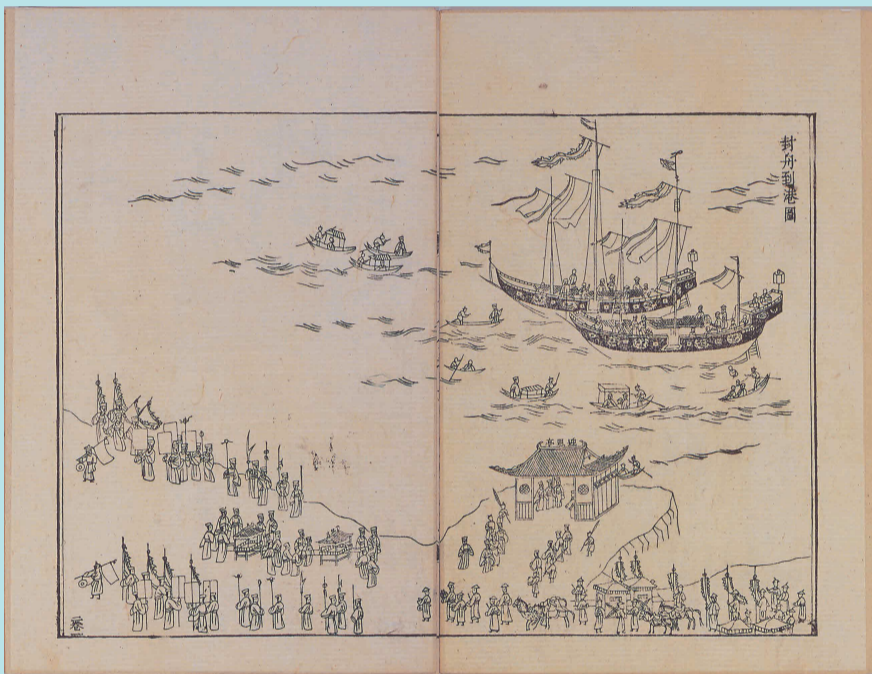


冠船
封舟
冊封
琉球王国

ハイサイ！「がんばる君を応援します！！」がモットーの<きじむん>です。入学から一ヶ月、新入生の皆さんはそろそろ琉大に慣れましたか？ レポート作成の時期も近づいていますね。図書館の利用でわからないことがあったら、カウンターに相談に来て下さいね〜。

今回は、夏の時期、南寄りの季節風と共に琉球にやってきた中国からの使者「冊封使」についてです。

冊封使とは？



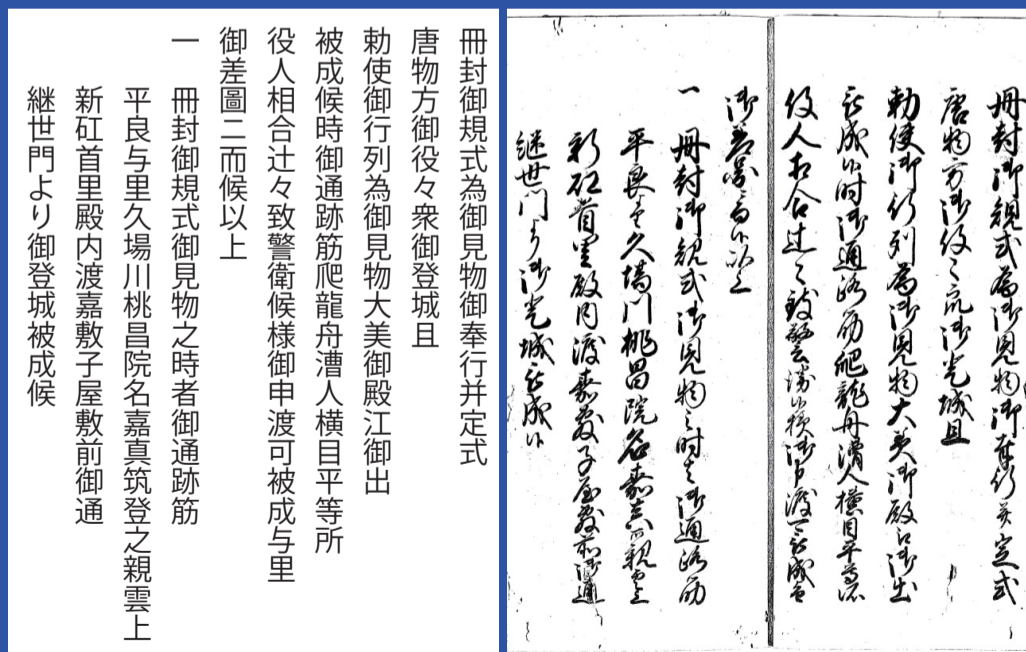
琉球国は明清時代を通じて定期的に中国に使者を派遣し、朝貢関係を維持していました。冊封とは、中国皇帝が皇后・太子・諸侯などを任命することをいいます。琉球では、国王が死去すると、王位継承者(世子)が中国へ使者を派遣し、自らを「琉球国中山王」として冊封することを請います(請封)。琉球からの請封を受け、中国から役人が琉球へ派遣され、先王を祭り(諭祭)、新しい国王の冊封の儀式を執り行いました。冊封使とは、中国皇帝の任命を受けて、朝貢国の国王を冊封する文書(詔勅)をもたらすために派遣される使者のことです。琉球国には明代で15回、清代では8回冊封使が派遣されました。中国からの使節団は従人や水主(かこ)などを含めて総勢400人から多いときで600人を超え、二隻の船に乗って旧暦の5月から6月頃に那覇港にやってきていました。

※画像は 琉球・沖縄貴重資料デジタルアーカイブ 仲原善忠文庫 公開番号113 『重刻中山伝信録 巻二』より。那覇に到着した冊封使の船(封舟・冠船)の様子。

冊封使がやってきた！！

中国との朝貢関係を維持する一方で、1609年以降の琉球は薩摩(江戸幕府)の支配も受け、那覇には薩摩の役人達が駐在していました。薩摩(江戸)との関係は中国には知られてはいけないトップ・シークレット！ 冊封使達が琉球にやってくるからには、ちょんまげ・二本差しの武士の姿を見られては一大事なのです。そのため、冊封使来琉中、薩摩から派遣された駐在の役人は浦添間切城間村(現浦添市城間)へ移動することが決められていました。しかし、彼らはこっそり冊封の儀式を見学していたようです。「冠船爬龍舟方日記」(尚家文書)には冊封関連行事を見学する薩摩の役人を案内するための道が指示されています。

数十年に一度しかない冊封の儀式。隠れてでも見たいビッグ・イベントだったのでしょね。 沖縄資料担当T



※冠船爬龍舟方日記(尚家文書：紙焼き製本版より。原本所蔵館：那覇市歴史博物館)

【参考文献】

赤嶺守『琉球王国-東アジアのコーナーストーン』2004年 請求記号201/AK ([2G] 沖縄開架資料) 麻生伸一「近世琉球における冠船と民衆」『日本歴史』2011年11月号 No.762 (2F 雑誌書庫) 曾煥棋『清代使琉球冊封使の研究』榕樹書林 2005年 請求記号201.18/SO ([2G] 沖縄開架資料) 豊見山和行「冠船貿易からみた琉球王国末期の対清外交」『日本東洋文化論集』No.6 2000年

○当館では那覇市所蔵の国宝「琉球国王尚家関係資料」の文書の複製資料が閲覧できます。詳しくは総合カウンターにお尋ねください。

○「沖縄情報統合検索システム(iXio)」では本学附属図書館だけでなく、沖縄県立図書館やアジア歴史資料センターなどの機関のデータベースが横断で検索できます。